

閉会の辞 鈴木晶子（理化学研究所 AIP チームリーダー、京都大学教授）  
「AI 技術文明時代の人倫とは」

AI 技術文明時代の人倫像と題しまして、2 日間にわたって国際会議を開催させていただきました。この会議では AI がもたらす未来社会を構想するうえで、AI の研究開発はもとより、生物学、情報学をはじめ法、哲学、経済、社会など様々な分野の最先端で活躍しておられる方々にご登壇いただきました。AI 関連技術を、長いスパンでみて新たな技術文明の一時代の到来とみたとき、私たち人間が考えておくべき諸点についてお話いただきました。こうして無事、会議を終えることができますのも、ご登壇の皆様はじめ、議論を大変高い関心をもって見守ってくださったフロアの方々のお陰を心より御礼申し上げます。この国際会議を通して、私ども人工知能倫理・社会チームの今後の研究プロジェクトの進むべき道について、大変多くの示唆を頂戴いたしました。閉会にあたり、今後の研究プロジェクト推進に向けて肝に命じておきたいことなど、ご挨拶かたがた少し述べさせていただきます。

今回、この国際会議を企画しました時に、まず思いをいたしましたのは、やはり AI 技術に対しては、期待と同時に不安もまた大変大きなものになりつつあるという認識でした。そうしたなかで、では私たち人間はどのような観点から、AI 技術、AI 関連技術というものを捉えていけばよいのかを国際会議を通して問題提起したいと思いました。そのための一つの視座として、AI 技術を単に表面的な新たな技術としてのみ捉えるのではなく、これまでの人類が作ってきた技術文明の歴史に、AI 技術を通して新たな 1 ページが加わったものとしてとらえることを提案したいと思いました。技術文明の一環として AI 技術を位置付けていく視座です。そして、人間が道具や機械を発明し、それを活用することを通して、人間自体の能力や技能も様々に変化しながら進んできた、という人類の足跡をまずは土台として、AI 技術についても考えていきたいと思いました。私たち人間は AI を活用し、その活用を通して技能や技術を改変しながらこれからも生きていく。その有り様をどのように見つめ続け、振り返り、その反省を、未来の創造へと繋いでいくことができるか、を問うことがまずは人間の使命であろうと思った次第です。技術文明という観点から AI 技術を位置づけていく作業が、今後とても重要になってくるのではないかと。これが、私どものチームでの研究のプロジェクトの出発点にあり、また、国際会議の場は、その基本を確認し、さらなる議論に向けての土台創りの場でありたいと考えました。

長尾先生のご講演には、これから人工知能の開発が急速に進展していくと、AI 人間を超えていくのではないかと、予言とも思われる衝撃的なメッセージが込められてお

りました。人間にとっての、この危機的ともいえる状況をばねに、人間社会がより豊かなものにしていくためにはどうしたらよいのでしょうか。AI 技術文明という視座から、AI 技術が人間を凌駕していくかもしれない未来を考えるならば、私ども人間は、まず、人間とはどのような存在で、どんな能力や可能性を有しているのか。また、今後、どのように変わっていくことができるのかという、人間というもののあり様について、今一度探求していくことが必要だといえるでしょう。人間がこれまで、自らの人間という存在をどのように捉えてきたのか、動物との比較で人間の特性を定義していた時代から、今や機械との比較を通して私たちは人間性というものを再定義しなければならない時代に生きているということだと思います。これは AI 技術文明という、まさに新しいステージを意味しているともいえるかもしれません。そのような観点から、哲学の蓄積も含め、生物学、情報学、法学、経済学、教育学など人間の営みを探究してきた様々な分野が結集し検討していくことが求められていると考えます。自然科学だけではなく、人文社会科学だけでもありません。このような分け方は、所詮、18 世紀以降のこと、ここ 300 年くらいのことです。古くは哲学が学問の母であった時代に思いを馳せると、目の前の様々な現象や、人間、その人間を取り巻く世界や宇宙を考えていくような、総合的なパースペクティブを形成していくために、AI 技術がもたらしつつある新たな動きをとらえ、文明の創造そして人類の使命と責任について考えていく契機としていくことが可能だといえます。これが第一点でございます。

二点目です。本国際会議では登壇の方々のご講演、そして討議において、新しい技術を取り入れることにより大きく変貌していく人間社会のあり様が焦点となっております。私どもは古来、それぞれの国で、それぞれの民族で、様々な宗教や文化、あるいは慣習というものを持っています。毎年のクリスマスやお正月、様々な儀礼を通して私たちは文化的な価値というものを大切にしてきました。その文化的な価値を大切にすなかで、私たち人間は自ら発明した様々な道具や技術を活用してきました。このことを踏まえると、AI 技術文明においては、これまで培ってきた文化と新たな科学技術をどのように接続していくか、まさに文化と科学技術を接続するための智慧が問われているのだと思います。文化と技術の接続、文化と科学の接続をいかに滑らかに実行していくか。これが大きな課題であろうと思われます。Smart City とか、Smart Society を考える際に、私たち人間がこれまで享受してきた文化を全て抹消してしまい、過去の遺産を全て忘れて新たな都市や社会を建設しようとする試みも出てくるかもしれません。その方が、新たな都市や社会を構築するには簡単です。つまり民族間の争いであったり、宗教による違いによる憎悪であったり、様々なネガティブな感情を持った私たちの過去というものと全く決別してもらって、そして新しい社会に向かいましようという、という話ならば、いとも簡単に最先端の技術を駆使した未来都市が実現するのではないかと想像することもできます。しかし、文化は人間のものの考え方や価値観、人々の暮らしの細部に

働く知恵など、人間がこの世界でこれまで生きてきた歴史が様々な形で人間社会に沈潜しています。伝統的なものや価値観、行動様式など人間が生きていることそのものの時間が刻まれた広義の文化というものを否定して、技術本位に社会を構築することはできないのです。新しい技術をいかに文化と滑らかに繋いでいくかが、問われるところです。

本国際会議では、法律や経済の観点から、人間社会がどう変わっていくかについても詳細な議論がなされました。これまで近代科学が発生した 17 世紀以降、その近代科学をモデルにした社会システムというものが、この 300 年から 350 年続いてきたけれども、そろそろそのシステムでは立ち行かなくなるのではないかという問題意識に裏付けられたものでした。そういう新しい時代が、AI 技術が様々な領域に普及し浸透することによって訪れるのではないか、というのが、登壇の皆様に通の認識であったといえます。近代社会の原則では、人間は自分で自分の権利を守るために、自ら物事を決定することができる自律的な人間でなければならないこととなります。近代的啓蒙の時代では、成熟した市民主体を基本に個人というものを捉えてきたわけですが、この考え方では、これからのデータ駆動社会は立ち行かなくなるかもしれないというご指摘もございました。あるいはプライバシー・データは、個人が占有的に所有できるのだというこれまでの近代的なとらえ方を堅固に守っていたのでは、これからは不利益を被る場合も少なくありません。自己のデータを提供しなければ最低限のサービスすら受けられないということがエストニアなどいろいろな国で既に始まっています。また経済に関しましても、最近では無料で様々なサービスを受けることができるような場合が増えてきていますが、実は別な形で対価が支払われているといった仕組みが広がりつつあります。物の価値や貨幣というものの自体の機能も変わってきています。さらに、教育の面では、近代学校教育システムが果たして AI 技術文明の時代に生き残ることができるのか疑問です。18 世紀の啓蒙運動をモデルにした近代的な学校教育のシステムにあまりに馴染んでしまった結果、別様の教育の可能性について論じること自体、非常に冒険的なものに映ってしまう傾向があります。例えば、教育というと、当然のように専門家が素人に教える、教師が生徒に教えるというのが一般的です。科学コミュニケーションでも、専門家が素人に科学について教える形が未だに主流で、素人は素人ならでの勘やセンスで専門家と対等に議論する場にはなっていません。近代的な教育の基本モデルはこれで済んできたのかもしれませんが、これからはそうとはいえません。科学技術が多くの人々の日常の暮らしに浸透していった時に、確かに専門家の立場ではこう見えるかもしれないけれど、その科学の知見や技術によって生み出された製品を使うことで、利便性だけでなくリスクもまた大きくなるかもしれない。そうしたやり方では何か危険な感じがする、何か嫌な感じがする、不安であるといった勘は、研究開発の当事者であるがゆえに逆に気づきにくくなっているような事柄に、生活者ならでの勘を働かせることもできるはずですが、日常を生活している生活者としての直観のようなものが、実はこれからとても重要になっ

てくるのではないかと思います。若い世代は、生まれた時からデジタル技術、AI 技術に囲まれて育っていくことでしょう。デジタルネイティブ、AI ネイティブが社会の大半を占める時代もそう遠くはありません。そうしたなかで、自分が得意な分野について若い世代が年配世代に教える機会も増えることでしょう。世代が相互に学び合うことを通して、新たな学習の形も生まれてくるかもしれません。そうした学びの場では、頭脳だけを使うのではなく、心や感情、身体を介した新しい学習形態も出てくるだろうと思われます。このように 18 世紀以降の近代的な社会システムをそのまま保持していたのでは立ち行かなくなりつつあることに気づかせてくれているのも、この AI 技術文明の時代の特徴ではないか、そのように理解することもできるのではないかと思います。

AI 技術の進展により、人間の頭脳、大脳皮質の働きから、今度は感性、感情、心、そして無意識という具合に、人間の働き、その営みを代替できる段階に近づきつつあるといます。こうしたなかで、人間が人間らしさを失わない、あるいは人間が人間であり続けることはどういう意味を持つのでしょうか。これも人工知能の時代に人間の生きる道として今後考えていくべき重要な課題であろうと思います。また、AI は人間の労働をも変えていくことでしょう。何のために人は働くのかという根本的な命題と私どもの世代はきちんと向き合い、次の世代に対して希望をもって語るができるようでありたいと思います。今現在、10 歳の子どもが 10 年後の世界をイメージし、その世界で自分は一体どんな仕事をしているかということをも希望をもって思い描くことができる社会を実現していくこと、これは私たちにとって一番チャレンジングな課題であろうと思われる。京都には「門掃き（かどばき）」という習慣がございます。毎朝、自分の家の前を掃除する際に、両隣や向かいのお宅の前も気を効かせて、少し余計に掃除をするのですが、その「少しはみ出て掃除する」際の、「少し」というその案配がなかなか難しい。あまりはみ出してしまって、お隣の敷地に大きく張り出て掃除をしてしまうと、お隣はあまりいい気持ちがない。お互いがお互いの家との境に見えない「のりしろ」のようなものを用意する昔ながらの知恵だといえます。人と人、家と家との付き合い、世間づきあいの知恵が、社会の絆を支えてきました。家一軒ごとに境界をはっきり隔ててしまい、その先からの掃除はお隣の、よそのお家の責任だから、と割り切り片付けていたのでは決して生まれない智恵でございます。ワーキングシェアという時も、シェアする際に、ただそれぞれが別々に独立して分担するという考え方もありますが、互いが互いの仕事の大変さや価値を少し手伝いながら分かったうえで、それぞれが持ち場に責任をもつといったグレーゾーンを活かしたシェアの仕方もあり得るかもしれません。Betweenness の智恵、間の知恵、案配の知恵は、おそらく京都だけでなく、日本、さらには世界じゅうで様々な形で人々の暮らしの知恵として働いているのではないかと思います。近代の社会システムをうまく合理的に機能させようとするなかでいつの間にか忘れられたままになっている、こうした智恵を集結し、そしてそれを次の新たな時代に合うようにアレ

ンジしていくこともできるのではないかと思います。

今回の国際会議では、OECD やユネスコなど国際機関のレベルで AI の倫理や法の検討をしておられる方々、また国内での AI に関わる様々な政策についての検討や討議、さらに AI の研究開発に関わっておられる方々にご登壇いただき、またラウンドテーブルでは討議もしていただきました。こうした議論を踏まえつつ、これから私どもの人工知能倫理・社会チームでは、新しいプロジェクトとして AI の Human Ethics について検討し国際発信していきたいと考えております。Human Ethics は文字通り日本語に訳すならば、人間倫理、あるいは東洋の伝統的な表現でいうならば人倫とでもいえるかと思えます。Ethics が古代ギリシア以来、習慣を意味する Ethos エートスに由来することを思い起こすならば、Human Ethics は人間のエートス、言い換えるならば、人が人として生きる道、Way of Living と言い換えることもできます。人が人としてこの AI 技術文明時代をいかに生きていくか、その道を探るような新しいフィロソフィーの構築も含め、今後、プロジェクトを推進していきたいと思っております。この国際会議はそうしたプロジェクトのまさにキックオフの場として開催させていただきました。今後、また引き続き皆様がたのお知恵をお借りしながら、Human Ethics のプラットフォームを築き、国際発信へと繋いでいくことができるよう、努めてまいりたいと思えます。

2 日間にわたるとても長い会議でもございましたけれども、皆様方本当に熱心にご参加いただき、本当にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

今回の開催におきましては、海外からのお客様、国内からも各地からお客様がおいになり、そしてまた登壇していただきました。また開催にあたりましては、国際高等研究所にも大変お世話になりました。そして何より私どものチームをここまでずっと支え続けてくださった理化学研究所そして革新知能統合センターに感謝いたします。理化学研究所のスタッフの皆様には、2 年越しのプロジェクト、実際に実現に向けてはこの半年ぐらい、集中的にいろいろとご協力いただいてまいりました。こうした支えがなければ私どものチームの活動をこうした形で世に問うことができませんでした。また京都大学の方からは私の教室の院生さんや学生さんたちが応援に駆けつけてくれました。こうした様々な方々のご協力があったのことで、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

それではこれもちまして、この AI 技術文明時代の人間像と題しました国際会議の方、締めさせていただきます。本当にありがとうございました。